

かわさきでの
ヘイトスピーチ
を許さない！

1月23日
市労連会館

[オールかわさき]市民集会

近年、在日コリアンの集住地域などで差別・排外主義団体が人種差別集会やデモ行進を繰り返しています。その表現は「朝鮮人首つれ、毒飲め、飛び降りろ」、「良い韓国人も悪い韓国人もみんな殺せ」、「南京大虐殺じゃなくて鶴橋大虐殺を実行しますよ」など、特定の民族に対して聞くに堪えない憎悪と差別の扇動（ヘイト・スピーチ）を行っています。

このような行為は京都の朝鮮人学校に対する攻撃をめぐる裁判で、高裁は「表現の自由の濫用であって、法的保護に値しない」と述べ、最高裁も上告を棄却して判決は確定しました。また、法務省は昨年12月、在特会の前会長・桜井に対し朝鮮大学校前で実施したヘイト・スピーチが人権侵害に当たると認定し、繰り返さぬよう勧告しました。しかし、勧告には強制力がなく、差別を禁止する法の制定が必要です。

ここ川崎でも既に10回を超えるヘイトデモが実施され、昨年11月には在日コリアン多住地域である桜本へのデモが計画されましたが、これに抗議する約300人が集まり、「壁」をつくってコースを変更させました。にもかかわらず、再びヘイトデモが計画されています。

今後、私たちが取り組むべきことは、人種や民族に基づく憎悪と差別の扇動を終わらせよう！という市民の声を結集して議会や自治体政策に反映させることです。

地域社会に暮らす外国人や外国につながる人々の人権と人格を尊重し、差別と排除のない共に生きる多民族・多文化共生社会を形成することは自治体の責務です。1月23日の集会に参加して、川崎市に私たちの声を届けよう！

日時：2016年1月23日（土）13：00～

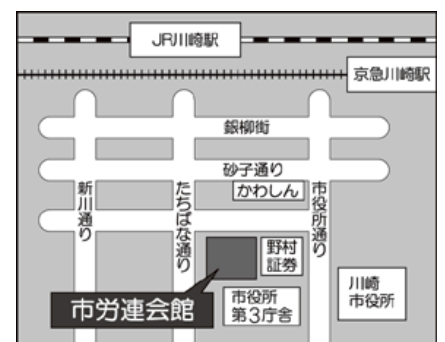
場所：市労連会館 5F 講堂

発言：^{シン スゴ}辛淑玉 さん （のりこえねっと）

：^{キム チョルミン}金哲敏 さん （弁護士・東京弁護士会）

主催：「ヘイトスピーチを許さない」かわさき市民ネットワーク

呼び掛け：（社）青丘社、川崎・富川市民交流会、クラック川崎



みんなで声をあげ、差別のないかわさきを！

冷たく、陰鬱な雨が落ちていた。日曜の午後、公園に人影はなく、辺りには100人を優に超える警察官が取り囲むように集まっている。

住民とおぼしき中年男性が声を掛け続けた。

「デモがあるんだって? どれくらい集まるのかな」

これから始まるようにしていることが近隣に伝わっているを知り、息をのむ。1時間もしれば見慣れた顔がそわい、日の丸を手に「朝鮮人をたたき出せ」などと叫び声を上げるはずだ。

「この辺は韓国人が多いからな。でも、ずっとここに住んでいるんだ。出て行かなくて、どういふつもりなんだ」。男性はこちらの顔をのぞき込むようにして続けた。

「ところであなたは反対派かい?」のち、男性がデモの標的である在日コリアンの一人だと知り、その醜態をあらためて思った。8日、川崎で11回目を数える「ヘイトスピーチ・デモが行われようとしていた。それはまた、いつもの通うコースで計画されていた。

最初の警告は2日前、ツイッターで発せられた。

悪意

「ここ一両日で桜本商店街にリイクされた情報を地元関係者および、当方で調査したところ、悪意は明確には認めませんが、川崎コリアンタウンである桜本商店街の目の前をヘイトデモのコースとして、このことが、ほぼ確実な状況とな

ています」

桜本の底力①

差別阻んだ街の良心

時代の正体

ヘイトスピーチ考

「戦中戦後と差別にさらされ、自尊心を傷つけられてきたハルモニが自分の気持ちを表現するに、受け止めてもらえないという安心感がなければいけない。その受け皿となる地域は一朝一夕にできたものではない。教育を受けられなかった在日一世のために開かれている識字学校のボランティア、鈴木安子(78)はそう語る。差別デモは、この街で積み重ねられてきた人々の営みを踏みにじり、桜本の街そのものを否定しようとしていた。

確信

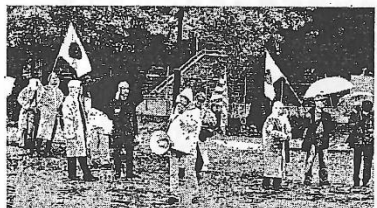
「大きな騒ぎになれば、肩をひそめる地元の人ものいるかもしれない。だからといって黙ってやりすごす選択はない。中途半端は駄目。このデモは許されない社会悪なのだ」と伝わるよう、やるからには一つにまとまって徹底的にたたきやがて呼応する。

「攻撃対象者の生活圏に近く、なんの許さへん」

「圧倒的な数で囲んで潰した」

「マイノリティへの直接的な攻撃を官公署が容認しているという事態なんだ」

「抗議する人がひとりでも多いと攻撃対象にされる地元の人はずいぶん不安になる」



デモ行進に先立ち公園で集会をする参加者＝8日、川崎市川崎区

再びクラック川崎のつぶやきが、事の重大さを伝える。

「コリアンタウンを直接ターゲットにするデモは新大久保以来、約2年間、首都圏で実施されておらず、今回の桜本の件が本当なら、デモ申請をそのまま受理した県警と川崎署はこれまでの均衡を破る重大な誤判断をしていることになる」

果たして、富士見公園ふれあい広場に集まったデモ参加者は14人。前回6月の5分の1程度だ。しかし、数の問題ではない、と思

い直す。主催者、津崎尚道が肩から掲げた拡声器で話し始めた。

「ハルモニがデモをやったって? 自分たちが正体をばらし、どうするんだよ、朝鮮人!」

やはり当てつけなのか。参加者の一人が続いた。

「川崎に住むこみ、ウジ虫、ダニを駆逐するデモを行うことになりました」

反響が始まった。集合場所の公園、デモコース途中の交差点、桜本商店街の入り口にそれぞれ100人前後が集まった。地域の人々、そして川崎や首都圏で活動するカウターの人々。デモに並走しながら「差別をやめろ」「レイシスト(差別主義者)は隔離」と叫び、「ヘイトスピーチやめろ」と書かれたプラカードをさす。待ち受けるカウターの口から、座り込みや車を横向きにして通りをささぐといった実力行使の法行がさやられる。

公園を出た一団はバス通りを東へ進む。藤崎4丁目の交差点が見えてくる。右に曲がれば400メートルが桜本の街。「帰れ」コールのボルテージが上がる。

「交差点を右に曲がるのか。」「いや、左だ」

「桜本を通るのではないのか。」「その予定だったが、変更になったと聞いた」

「きよになつてからだ」

デモは左に折れた。沿道から小さな歓声が起る。「桜本には行かない」「最悪の事態は避けられた」

それはしかし、小さくない勝利であるはずだった。翌日、三浦はツイッターを追ってみた。

「飛入りのカウターがすごかった。町が怒っている感じがハッキリした」

「レイシストへの怒りはもちろんだが、街全体から「奴らを通すな」という強い意志が感じられた」

三浦は確信を深める。この街は差別に対してきちんと「ノー」と表現することができた。地域の勝利だ。

後日、川崎署はコース変更について説明した。「トランプルが起る可能性があれば主催者と協議の上、調整を図ることはある。一度申請を受け付けたものでも、それがすべてではない。主催者の意向を比較考量しつつ、安全を保つことはわれわれの使命だ」

大勢のカウターが怒り、行動に移していなければ、デモは予定通り桜本へやって来ていたという意図を意味していた。

地域の勝利。かつてない規模のカウターにつながったコリス情報が事前にもたらされたのも、そうであるに違いない。地元川崎に住むカウター、長島純一(41)は言った。「この街が培ってきた良心が情報をリイクさせたのだろう」

差別主義者の行く手を正義の人垣が阻んだ。ヘイトデモ阻止に奔走した人々を追った

(石橋 学)

《敬称略》

Ⅱ動画はウェブサイトに「カナロコ」に